

## 信仰の錯覚

丸山 勉

### 【聖書】 士師記 8章 22節～32節

「イスラエルの人々はギデオンに言った。「ミディアン人の手から我々を救ってくれたのはあなたですから、あなたはもとより、御子息、そのまた御子息が、我々を治めてください。」ギデオンは彼らに答えた。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる。」ギデオンは更に、彼らに言った。「あなたたちにお願ひしたいことがある。各自戦利品として手に入れた耳輪をわたしに渡してほしい。」敵はイシュマエル人であったから金の耳輪をつけていた。人々は、「喜んで差し上げます」と答え、衣を広げて、そこに各自戦利品の耳輪を投げ入れた。彼の求めに応じて集まった金の耳輪の目方は、金千七百シェケルで、そのほかに三日月形の飾り、垂れ飾り、ミディアンの王たちがまとっていた紫布の衣服、らくだの首に巻きつけてあった飾り物があった。ギデオンはそれを用いてエフォドを作り、自分の町オフラに置いた。すべてのイスラエルが、そこで彼に従って姦淫にふけることになり、それはギデオンとその一族にとって畏となった。ミディアン人は、イスラエルの人々によって征服されたので、もはや頭をもたげることができず、ギデオンの時代四十年にわたって国は平穏であった。ヨアシュの子エルバアルは、自分の家に帰って住んだ。ギデオンには多くの妻がいたので、その腰から出た息子は七十人を数えた。シケムにいた側女も一人の息子を産み、彼はその子をアビメレクと名付けた。ヨアシュの子ギデオンは、やがて長寿を全うして死に、アビエゼルのオフラにある父ヨアシュの墓に葬られた。

### 【序】 士師記が語りかけるもの

聖書は、いわゆる道徳の本ではありません。わたしたちに真の神様を示してくれる書物です。ある聖書学者はこのように申しました。「神を神とせよ。そして己を、造られた者として生きよ。これが聖書の根本的な主張です」と。ところが、旧約聖書の歴史を見てみると、私たちは、神様に目をかけて頂いたイスラエルの民が、**何度も何度もその神様を裏切る歩み**をしていたかがわかります。

この士師記もそうです。士師記には 12 人の士師たちが入れ替わり立ち代り登場してきますが、もともとなぜ士師が立てられたかという、イスラエルの民がカナンに入り、そこで偶像礼拝の罪に陥ったからです。既に 2 章で見たことですが、偶像礼拝に神様は怒られて、イスラエルを略奪者の手に任せ、周りの敵の手に売り渡されました(2:14)。イスラエルの民が苦境に立ったので、神様は憐れんで、士師をお立てになり、奇跡的に敵を打ち破る。しかし安泰な生活が続くとまた神様を裏切ってしまう。また外敵が向かってくる。苦境に立たされて神様に叫ぶ。そして神様は新しい士師を立て、戦いに挑ませる。勝利する。しかし、また墮落する…。そのことの繰り返しです。学習能力がないのかな? などと思ってしまうのですが、では、果たして私たちは例外ですと言えるのかどうか、そこを聖書は問いかけていると思います。7 章に記されていた、たった 300 人の兵で 13 万人以上というミディアン軍に勝利したギデオンも(それは本当に神様による奇跡的な勝利以外の何ものではないのですけれども)、今日の 8 章の箇所では、ちょっと目を覆いたくなる姿を露呈してしまっています。

## [1] ギデオンの錯覚

8 章では、ギデオンが実は神様が言われたこと以上のことをしているのです。主がギデオンに言われたことは、イスラエルをミディアン人の手から救い出すことです(6:14)。そしてそれは 8:12 で勝利のうちに終わっているのです。しかし、その後、もともと敵ではないスコトとペヌエルの人々とその町を破壊しているのです(8:16-17)。このことは、神様は命じてはいません。やり過ぎです。戦いの性格が変わってしまっています。

さらに 8:18 以下を見てください、ギデオンは捕らえていたミディアンの王であったゼバとツアルムナに対して、彼らがタボルでギデオンの兄弟たちを殺したことを知ると、自分の長男イエテルに二人を殺せよと言います。しかしイエテルは年若く、そのようなことが出来ません。そこで、ギデオンが自ら剣を抜いて二人の王を殺しました。血なまぐさい話であります。

そこで、今日の聖書箇所になるわけですが、ここでのギデオンはどうでしょうか？ 私にはこの時のギデオンという人間が今ひとつ、よく分かりません。というのは、言葉では実に立派な言葉を言っているのです。8:22~23 です。「イスラエル人はギデオンに言った。「ミディアン人の手から我々を救ってくれたのはあなたですから、あなたはもとより、御子息、そのまた御子息が、我々を治めてください。」ギデオンは彼らに答えた。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる。」

この最後の言葉は実に素晴らしい言葉です。自分ではないのだ。主、治め給う、と。しかし、そのあとの行動が不思議と言いますか、矛盾しているようにさえ見えるのです。戦利品でエフォドを作っています。エフォドというのは、祭司が身につける装束です。金千七百シケル、つまり約 20 キロほどある金の耳輪、また王様の飾りなどを集めて、エフォドを作らせ、それを自分の町に置いたというのです。金の子牛とは違ってそれ自体が偶像という訳ではないかもしれませんが、なぜそのような権威の象徴のようなものを作ってしまったのでしょうか？

ギデオンは、祭司ではありません。祭司には、レビ族しかありませんでした。ギデオンはマナセ族です。祭司とは、ご存知のとおり、神様と人間の間をとりなす役割を担う者です。神殿の務めを任せられる宗教的指導者です。ギデオンは、周りからの、王になってほしいという声にはノーを言いましたが、やはり、何か自分が、神様に選ばれた力ある権威者になったかのように錯覚してしまったのではないのでしょうか。ですから 27 節を見ると、このことが「畏」になった、と書いてあります。「ギデオンはそれを用いてエフォドを作り、自分の町オフラに置いた。すべてのイスラエルが、そこで彼に従って姦淫にふけることになり、それはギデオンとその一族にとって畏となった。」

「姦淫」とありますが、これは偶像礼拝の別の表現なのかもしれません。偶像礼拝とは、言ってみれば、他の神に浮気する、その神(とされるもの)と一体化する、ということです。その本質は「姦淫」と言っても良いのだと思います。あの神様の大きいなるみ業に直(じか)に触れたギデオンであれば、このような状況があればモーセのように怒って、やめさせる立場ではないのでしょうか。そうではなくて、むしろその中心にあるかのような描き方です。しかも、たくさんの妻と側女をかかえ、70 人の息子をもうけたとありますが、その一人の名は「アビメレク」です。これは、「我が父は王」という意味だそ

うです。ギデオンが命名したのでしょう。ここにもギデオンの隠れた心が見えてくるのではないのでしょうか。

## [2] 信仰と慢心

気になるのは、あのミディアン人との戦いの後、ギデオンには主への感謝が見られないことです。士師記 5 章では、女性の士師であったデボラは、戦いの勝利の後、恵みを数えて、主を賛美する歌を歌ったことが記されています。そのようなことがギデオンにはありません。ギデオンは、どうも「慢心」していたのではないのでしょうか？確かに、常識では考えられないような勝利を収めたのです。お山の大将のような気分になったとしても不思議ではないかもしれません。しかし、ここで問題なのは、主なる神様との関係が「今」どうなのか、です。

信仰者の慢心ということを考えて時に、私はイエス様の譬え話を思い起こしました。ある金持ちの譬えです。ルカによる福音書 12:16 以下です。

「それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

この金持ちは、豊富な蓄えで安心してしまったわけです。これでもう大丈夫だ、と。けれども、それで生きられるなどと思ってもみるなど主イエスは言われます。あなたの肉体的な命さえ、明日をも分らないではないか。そうであれば、さらに大切な神様との関係はどうなのだ？自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならないと、それは愚かな生き方なのだよ、と主は仰いました。

私はおかしな言い方かもしれませんが、「信仰の金持ち」になることに用心しなければいけないな、と思いました。「もう蓄えがあるから平気だ」という考え方です。「蓄え」——たとえば長い信仰歴、或いは、かつての大きな恵みの経験、または一生懸命にしてきた奉仕の数々…、もちろん、それは神様の恵みあつての体験で、否定されるべきものではありません。しかし、ギデオンではありませんが、そこにスーッと入り込んでくる「畏」があると思うのです。いつの間にか、自分でも知らないうちに、自分と神様がすり替わってしまう。賛美されるべきお方は神様なのに、自分もまんざらではないなど、自分を賛美してしまうことにつながってしまうということがあるのではないのでしょうか？これは、他人事ではないから言うのです。恐らく、牧師とか、教会の役員とか、責任ある立場を頂いている者ほど、心しなければならぬことなのだと思います。

## [3] キリスト者の生き方

ちょっと話がそれるようですが、私は、伝道の働きであるキリスト教放送局 FEBC の職場に入社した一年目だったと思うのですけれども、スタッフ全員の研修会で、その職場の代表者の方(以前牧師も長年し、ビジネスマンもしていた方)から、こんなクイズのようなものを出されたことが忘れられません。

少々乱暴な場面設定なのですからけれども、皆さんも考えてみて下さい。この地球に大きな異変が起こって、ほとんどの人間がもう既にいない。今後もどうなるかはわからない。ただたったひとつのシェルターだけが残されている。ただ、中に入れる人数は 10 人だけと限られている。それをくじ引きではなく、「あなたは残りなさい」と、皆の了解のもとで残す人を決めることにしたい。今残されている人の中には色々な人々がいる。ちょっと私の記憶も曖昧なので、厳密に聞いて頂かなくて結構なのですが、医者、警察官、銀行員、政治家、大学教授、自営業の店主、そして普通の主婦、アルバイト店員、運転手、保育士、また、小さな子供を持った夫婦、学生、また、牧師もその中にいる。その中で誰に残ってもらうかを決めて下さい。――。

もともとこれは一般の会社の中で行われたクイズだったようで、当時そこに、その後 FEBC の代表者になった上司も働いていて、クイズに参加していたのです。皆様だったらどうお考えになりますか？ ちょうどノアの箱舟に誰に入ってもらうか、というような話ですね。色々な考え方があってのだろうと思います。けれども、ビジネスの世界でこのクイズをした場合でも、このような極限の状況の中では、まず社会的名声とかは度外視されたそうです。議論をしながら、最終的にそこに参加した人が残って欲しいと考えたのは、まず小さな子供を持つ夫婦、そして女性、またこれからの世界を担うべき若い学生たち。そして、牧師という存在も残されるべきだと話し合われたそうです。「生き死に」という極限状況の中で、いわゆる宗教家の存在は大事だ、という話になったそうです。

私が驚いたのは、その話し合いを受けて、その時私の上司はこうに言ったと言います。「実は私は元牧師です。皆の結論と私は違う考えを持っています。女性や若い方を残す、これはその通りだと思います。しかし、誰かが生き残る替りに自分が死ぬとするならば、牧師は真っ先に立候補します」と。それを聞いた私たちはハッとしました。牧師が死んでしまったら、誰が伝道できるのだろう、と一瞬思いました。それを見透かすようにして、私たちの上司は私たち FEBC の スタッフに言いました。「伝道は、人間が人間の力をするのではないです。牧師が死んでも、聖書が残されていれば、その聖書の力そのものが、人の心に働きかけるのです。石が叫ぶ、と聖書にあるけれども、主ご自身の働きに信頼するのが伝道の根本です。私たちは、自分の能力によってではなく、今、憐れみによって、ただ神様の手の中の道具とされているのだから、自分の信仰も、自分の命も絶対化しないで、神様に委ねることが大事です。ここで働くというのは、ただ神様のお働きに信頼して、あなたを喜んでささげることなんです」と。目が覚めるような思いが致しました。そして、このことは私たち皆に言われていることとして聞いて良いのではないのでしょうか？

#### [4] 「按手(礼)の学び」を通して

先週の日曜日の午後に、「按手」や「按手礼」についての第二回目の学びを皆で致しました。また来週致しますね。実は、先週の学びの後、私なりに色々と考えさせられました。もしも「按手」を、それを受ける者が、何か神様からの権威づけやキャリアアップ(?)のように捉えるのであれば、それは禍でしかないと思います。そうであればしない方が良いでしょう。「按手」には様々な意味があるのでしょう。委託。派遣。祝福。教会員の委任。そして私自身が「重たい」と思ったことがあります。それは宣教研究所が出している『按手礼シンポジウム』にもあるのですが、1981年に西南学院神学部ミッションデー報告で、関谷定夫先生も語っておられていたことで、「手を置く」という行為の始

まりは、旧約聖書において犠牲獣に対するものであったということです。つまり手を置かれて、「生け贄」となるのです。自分が死に、主に献げられることを喜びとするということです。「按手」ということを、自分のこととして考える時、私はこのことをこそ問われているのだな、と思わされました。

そして考えてみれば、それは私自身の献身を促した御言葉と響き合うのです。ヨハネ福音書 21:17～19 です。「イエスは言われた。『わたしの羊を飼いなさい。はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。』ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、『わたしに従いなさい』と言われた」。

復活のイエス様が、この私にも語りかけて下さったのです。思い込みでは？と言われれば、それを違うと証明することは難しいです。しかし、思い込みでは心の中に喜びは生まれないと思っています。この主に、生涯を賭けて従って行きたいという思いは、継続しないと思っています。

### [結]キリストのお姿を仰ぎ見つつ

イエス様がまだおいでにならなかった旧約聖書の時代、信仰生活はある意味、律法を順守するため、大変な努力を必要としたと思います。今の私たちも、努力が不要と言う訳ではありませんが、ビクビクなくて良いと思います。私たちには、主イエス・キリストが与えられているのです。このお方こそが、罪にまみれ、そして何度も自己賛美に陥る私たちと、まことなる神様の間に架かる「道」そのものとなって下さいました。主イエスが、私たち全ての人間の赦しのためにかけられた十字架こそ、私たちへの神様の最大の愛の現われです。この主を見上げる時、私たちは、自分自身にこだわるちっぽけな信仰からも自由にしてくれるのではないのでしょうか。ローマの信徒への手紙 15 章 3 節にある主のお姿をいつも心に刻んでいたいと思います。

「キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです」。(新改訳)

### [祈り]

主イエス・キリストの父なる神様、今朝の礼拝、今朝の御言葉を感謝いたします。パウロは「貪欲は偶像礼拝にほかならない」とコロサイ書の中で言うけれども、私たちの信仰の生き方が、いつしか自分の満足、自分を喜ばす貪欲にすり替わってしまう罪深さ、また弱さを思わないではいられません。また、今、誠実にあなたの御声に聴くことを忘れ、あのギデオンのような過ちも、決して他人事ではないことを思わされます。しかし、あなたはこのような者を憐れんで、主イエス・キリストを私たちに送って下さいました。十字架と復活の主が、私たちのまことの神様となって下さるとは、何と感謝なことでしょうか。

私たちはこのお方の御言葉に聴き、従えば良いのです！ 今日、御声を聴きましたから、頑なな心を捨てて、幼な子の心を持ってあなたの御足の跡に従わせて下さい。また、私たち川越教会のこれからの歩みも、まっすぐに導いて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。